

日韓の家庭における対面呼称と接尾辞：家族構成員の関係からみる接尾辞の付け方と敬語の機能

著者	金 泰虎
雑誌名	言語と文化
巻	13
ページ	117-137
発行年	2009-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000484

日韓の家庭における対面呼称と接尾辞

—家族構成員の関係からみる接尾辞の付け方と敬語の機能—

金 泰 虎

はじめに

日韓の社会や家庭における対面呼称には、類似した様々な接尾辞が存在する。例えば、日本の「さん／様」・「氏」・「君」・「ちゃん／ちゃま」は、韓国の「ニム (님)」・「氏 (씨)」・「君 (군)」・「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」に対応する。この中でも、日本の「さん／様」・「ちゃん／ちゃま」⁽¹⁾、韓国の「ニム (님)」・「氏 (씨)」⁽²⁾ は敬語として分類されている。

ところで、日韓における敬語の機能に関する比較研究を行った買恵敬氏は⁽³⁾、次の7つのパラメーターによって、日本語と韓国語の敬語が決まるとしている。つまり、①年齢（年上対年下・先輩対後輩）、②地位（上役対下役・教師対生徒）、③性（男性対女性）：女性のほうが敬語を多用、④親疎（身内対外者）：外者には敬語を用いる、⑤文体（日常語・講演・講義）：日常語より講演・講義のほうが丁寧語を用いる、⑥公私（会議・儀式かどうか）：私的な場より公的な会議や儀式で丁寧語を用いる、⑦教育（教育の有無）：ある人のほうが多く用いる、といった分類をしている。そこで氏は、両国の社会や家庭などの人間関係全般における、年代（年齢）別の敬語使用の傾向やその機能の分析を行っている。

しかし、先行研究より少しその考察の範囲を狭めて、日韓における家庭の人間関係に限定し、しかも対面呼称の接尾辞に着目してみると、従来の研究において提示されてきたこととは異なる、新たな敬語の機能や接尾辞の付け方の傾向が確認できるのである。

そこで、日韓の敬語の使い方を踏まえて、家庭における対面呼称や接尾辞について、現代敬語⁽⁴⁾を中心に考察を行う。この分析の範囲を家庭に限定したのは、日韓における対面呼称や接尾辞が用いられる環境、条件を同一にするためである。というのは、日本社会では「ウチ」と「ソト」によって敬語を使い分けるのに対し、韓国では「ウチ」の概念しかもっていないという特徴がある。いわゆる日本の「相手尊敬」、韓国の「絶対尊敬」の違いである⁽⁵⁾。したがって、使用範囲を家庭に限定することによって、日韓における敬語の使い方の違いを考慮する必要がなくなり、同じ環境下で使われている敬語を比べることができる。しかし、必要に応じては、一般社会の用法と比較も行う。

本稿では、日韓の家庭における対面呼称や接尾辞を網羅して、接尾辞の付け方の傾向や特徴、その敬語の機能を考察し、ひいては接尾辞が家庭内における人間関係をいかに反映しているのかについても把握する。

ところで、家族（家庭）とは、血族だけ、血族と姻族、場合によっては再婚による連れ子、

養子が同居するなど、その構成形態は様々である。本稿では、連れ子や養子、そして対面呼称に表れる接頭辞は分析の対象外にする。こうして、様々な対面呼称やその接尾辞を確認しう一つの理想的なパラダイム、つまり世代間、「同世代」においても上下間、その中でも男女、血族同士、血族と姻族、嫁いできた人々同士における、それぞれの関係を提示して考察していく。特に、家庭における対面呼称やその接尾辞には「親疎機能」が色濃く反映されており⁽⁶⁾、家族内の親疎程度によって異なることもあり得るが、可能な限りそれらのすべてを網羅して分析を行うことにする。

第1章 日韓の家庭における対面呼称の接尾辞と家族関係

日韓の家庭において対面呼称につける接尾辞を網羅して考察を行う。この際、家庭における様々な対面呼称や、その接尾辞が想定できる理想的なパラダイムを提示して分析を行っていく。

(1) 日韓の家庭における対面呼称の接尾辞

日韓では、様々な対面呼称や接尾辞を用いているが、その中でも家庭における対面呼称に付ける接尾辞を網羅する。両国では、実に多様で酷似した接尾辞が対面呼称に付けられており⁽⁷⁾、家庭において用いられる接尾辞は、次の(表1)の通りである。

(表1) 日韓の家庭における対面呼称の接尾辞

対象	接尾辞の種類								
	男/女			男			女		
日本	ちゃん/ちゃま		さん/様	—	君	—	—	—	—
韓国	ア(아) / ヤ(야) / イ(이)		ニム(님)	氏	—	書房	オロン(어른)	室	宅

日韓の家庭では、名前・名字、あだ名、人称代名詞などをもって対面呼称とする。これらの対面呼称でも、呼び捨て、なお(表1)で取りあげている様々な接尾辞の付け方がある。

ところで、日本の社会では、対面呼称として氏名(フルネーム)・名前・名字を用い、またそれぞれ呼び捨ての、例えば「下鶴 隆」(氏名<フルネーム>)・「隆」(名前)・「下鶴」(名字)を用いる。しかし、家庭では氏名、名字の呼び捨てでもって対面呼称としては用いないが、名字・名前に接尾辞を付ける対面呼称は使うこともある。例えば、婿に「下鶴君」・「隆君」という対面呼称を用いるような場合である。

一方、韓国の社会では、例えば「金 泰虎(김 태호)」(氏名<フルネーム>)・「泰虎(태호)」(名前)・「金(김)」(名字)が呼び捨ての対面呼称に該当するが、名字だけの対面呼称は用いない。特に、家庭では氏名を呼び捨てする対面呼称はなく、氏名・名字に接尾辞を付けた対面呼称も使わない。但し、婿には名字に「書房」という接尾辞を付けて、例えば「金

(김) 書房」という対面呼称を用いるのである。

ところで、(表1)のように、韓国では名前に接尾辞の「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」を付ける対面呼称がよく見られる。これらは日本の「ちゃん/ちゃま」という接尾辞に該当すると言える。接続辞の「ア (아) / ヤ (야)」は、名前の最後の字に「バッチム (받침)」=「子音子」があるときは、「ア (아)」、ないときは「ヤ (야)」を付ける。

ところで、接尾辞の「イ (이)」は、「ア (아)」と同じく名前の最後の字に「バッチム (받침)」がある場合に用いる。例えば、「ミンヨン (민영)」という名前は、最後の字である「ヨン (영)」に「バッチム (받침)」の「ㅇ [h]」があるため、「イ (이)」を付けて「ミンヨンイ (민영이)」となる。

しかし、接尾辞の「イ (이)」は、主に文語体の中で名前に用い、また会話体においてはごく限られた場面の対面呼称にしか使わない。そこで、「ミンヨン (민영)」という名前に助詞の「-ヌン:ウン (는:은)」(-は)を付けた場合、接尾辞の「ア (아)」ではなく「イ (이)」を加えて、例えば「ミンヨンイヌン (민영이는)」(ミンヨンイは)と書く。この「イ (이)」が接尾辞として使われるものの、一般的に対面呼称に付ける接尾辞としては、「ア (아)」をよく用いるのである。

次に、日韓の社会や家庭におけるあだ名の対面呼称としては、例えば魚が上手に捕れる人を「魚釣り名人」、朝寝坊する人を「ジャムックロギ (잠꾸러기)」(朝寝坊の人)と呼んだりするが、これらに接尾辞を付ける場合もある。例えば、「魚釣り名人さん」・「ジャムックロギヤ (잠꾸러기야)」である。

そして、人称代名詞の対面呼称としては、日本の「お前」、韓国の「ヌ (너)」(お前)が取りあげられる。

ところで、日韓における対面呼称の特徴は、社会では職名、家庭では家族関係を表す名詞(例えば、「お父さん」・「お母さん」など)を用いる傾向が強いと言えよう。両国において各々の対面呼称の特徴はあるが、(表1)の接尾辞は社会でも付けられることがある。例えば、日本において職名に接尾辞を付けた対面呼称として、「部長さん」・「部長様」、一方の韓国では「部長ニム (부장님)」(部長様)が挙げられる。日本の「部長さん」に当たる韓国語の語彙がないため、話の内容によっては、日本の「部長さん」を韓国の「部長ニム (부장님)」に訳したりもする。

そして、家族関係を表す名詞の対面呼称に付ける接尾辞としては、例えば日本の「お父さん」・「お父様」に対し、韓国の「アボジ (아버지)」・「アボニム (아버님)」がそれぞれ対応している。この韓国の「アボジ (아버지)」という対面呼称に、日本の「さん」に相当する接尾辞は付いていないが、一般的に「アボジ (아버지)」は「お父さん」、また「アボニム (아버님)」は「お父様」と訳する。しかし、話の内容次第では、「アボジ (아버지)」を「お父ちゃん」、「アボニム (아버님)」を「お父さん」に訳したりもする。逆に、日本における接尾辞の「様」は、家庭ではほとんど用いないため、「お父さん」であっても、韓国語に訳す

る場合、状況に応じて「ニム (님)」付けの「アボニム (아버님)」と訳したりするのである。

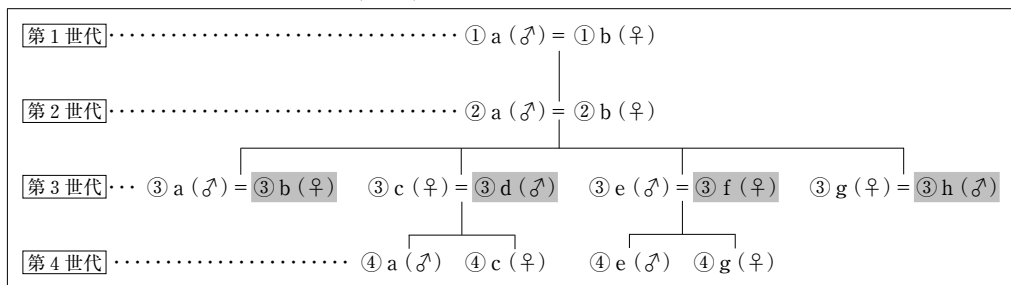
他にも日韓の家庭における対面呼称の接尾辞である「氏」・「君」⁽⁸⁾の付け方は、若干の相違点がある。これらと他の接尾辞の「オロン (어른)」・「室」・「宅」に関しては、後述の家庭における対面呼称や接尾辞の分析の中で取りあげることにする。

(2) 日韓の家族関係

日韓では、様々な家族の形態が存在しているが、中でも、夫婦とその未婚の子女、夫婦のみ、父親（または母親）とその未婚の子女など、いわゆる「核家族」化が進んでいる傾向にある。もはや両国では、親夫婦・子供夫婦・孫で構成される「大家族」という形態は少なくなってきていると言えよう。

ところで本稿では、以下の(図1)で提示しているように、曾祖父母、祖父母、両親、そして息子夫婦はもとより、嫁いだ娘夫婦の家族までを入れた理想的な「大家族」を設定して、その中で対面呼称と接尾辞を把握する。このパラダイムを設定した理由は、家族関係における様々な対面呼称を余すことなく確認するためである。したがって、日韓の『民法』における規定に基づいた親族・姻族の関係ではなく、(図1)の理想的な家族関係に基づいて論を進める。ちなみに、この理想的な「大家族」は、かつてブラジルに移住して荒野を切り開き農地開拓をした、移民初期の日系ブラジル人社会で希に見ることができる家族構成と言えよう。

(図1) 日韓における家族関係



<参考>

- ・ = は夫婦関係
- ・ - は兄弟関係
- ・ | は親子関係
- ・ 網掛けは姻族関係

この(図1)の日韓の家族関係に基づいて、「第1世代」から「第4世代」までの「大家族」における対面呼称や接尾辞を考察するが、その中心には「第3世代」を据える。この各々の世代間や同世代同士の中で飛び交う様々な対面呼称と、その接尾辞について分析を行っていく。

第2章 家族における「上の世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)に基づいて、日韓の家庭において「第4世代」が「第1世代」・「第2世代」・「第3世代」に対し、また「第3世代」の「第2世代」に対して用いる対面呼称の接尾辞を中心に分析する。(表1)の様々な接尾辞が、家族における「上の世代」を呼ぶ際、どのように付けられるのか考察を行う。

(1) 日本の場合

a. 「第4世代」の「第1世代」・「第2世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の「第4世代」にとって、「第1世代」の「①a(♂)」は曾祖父、「①b(♀)」は曾祖母である。なお、「第2世代」の「②a(♂)」は祖父、「②b(♀)」は祖母である。これらの人間関係における対面呼称やその接尾辞を整理すると、(表2)のようになる。

(表2) 日韓の祖父母に対する対面呼称と接尾辞

日本	ジジ・ジジイ	祖父・お祖父ちゃん／ちゃま	祖父・お祖父さん	お祖父様
	ババ・ババア	祖母・お祖母ちゃん／ちゃま	祖母・お祖母さん	お祖母様
韓国	—	—	ハラボジ(할아버지)	ハラボニム(할아버님)
	—	—	ハルモニ(할머니)	ハルモニム(할머님)

(表2)で見ると、「第4世代」が男系の孫であれ、女系の孫であれ、男女を問わず、「第1世代」や「第2世代」に対する対面呼称として、いずれも「お祖父さん」・「お祖母さん」、または「お祖父ちゃん」・「お祖母ちゃん」と言う。つまり、「第4世代」にとって「第1世代」は「曾祖父母」であるが、「第3世代」の「祖父母」に対する対面呼称と同じである。但し、希に「第1世代」と「第2世代」が同席しているとき、区別するため「ひお祖父さん」・「ひお祖母さん」という対面呼称を使うことはある。

ここで、一般的に「下の世代」や年少者に対しての対面呼称に付ける接尾辞と思われがちの「ちゃん／ちゃま」が祖父母にも用いられて、「お祖父ちゃん／ちゃま」・「お祖母ちゃん／ちゃま」と使われている。この「ちゃん／ちゃま」は、敬語の親疎機能の中で「親しさ」を表していると思えることができよう。しかし、「第4世代」の孫が幼い頃は、「第1世代」(曾祖父母)や「第2世代」(祖父母)に対して「ジジ／ジジイ」・「ババ／ババア」という傾向が強く、接尾辞の「様」を付けた「お祖父様」・「お祖母様」という対面呼称は、ほとんど用いないのである。これらの現象は「ジジ／ジジイ」・「ババ／ババア」や「ちゃん／ちゃま」を幼児語と考えることで説明できる。つまり、大人が使用するのは、幼児の視点で口真似することが由来である。

b. 「第4世代」の「第3世代」に対する対面呼称と接尾辞

同じく(図1)の「第4世代」にとって、「第3世代」は親、または叔父・叔母に当たる。ここで、両親に関する対面呼称や接尾辞を整理して取りあげたのが、(表3)である。

(表3) 日韓の両親に対する対面呼称と接尾辞

日本	パパ、お父ちゃん／ちゃま	お父さん	お父様	親父(オヤジ)
	ママ、お母ちゃん／ちゃま	お母さん	お母様	お袋(オフクロ)
韓国	アッパ(아빠)	アボジ(아버지)	アボニム(아버님)	-
	オンマ(엄마)	オモニ(어머니)	オモニム(어머님)	-

「第4世代」(子)が幼い頃、「第3世代」の両親に対しては、「パパ」・「ママ」、「お父ちゃん／ちゃま」・「お母ちゃん／ちゃま」という対面呼称や接尾辞を用いる。また、主に反抗期や成年期の男の子は、「オヤジ」・「オフクロ」という対面呼称を使うこともあり、これらは性別によって使用に差があると言える。しかし、一般的には接尾辞の「さん」を付けて「お父さん」・「お母さん」と言う。ほとんどの日本の家庭では、親に対しても接尾辞の「様」を付けた「お父様」・「お母様」という対面呼称は用いない。

ところで、(図1)における「第4世代」の「④a(♂)」・「④c(♀)」や「④e(♂)」や「④g(♀)」が、「第3世代」の両親以外の人々を呼ぶ場合、父方や母方を問わず、いずれも「叔父さん」といい、また「叔母さん」とする。ここで、「叔父ちゃん／ちゃま」、「叔母ちゃん／ちゃま」という対面呼称、つまり「さん」ではなく、「ちゃん／ちゃま」を用いることもある。この接尾辞も敬語の親疎機能における「親しさ」を表しており、相互間の距離を縮める機能があると考えられる。

c. 「第3世代」の「第2世代」に対する対面呼称と接尾辞

血族関係における「第3世代」(子)の「第2世代」(親)に対する対面呼称も、「第4世代」の「第3世代」における呼称と同じである。

なお、姻族関係の「③b(♀)」(嫁)や「③d(♂)」(婿)も、「②a(♂)」(義理の父)や「②b(♀)」(義理の母)に対する対面呼称は「お父さん」、「お母さん」であり、「さん」付けの接尾辞を用いる。つまり、姻族にも血族にも同じ対面呼称と接尾辞を使う。

日本の家庭では、「上の世代」に対する対面呼称として名前は使わず、家族関係を示す名詞に接尾辞の「さん」・「ちゃん／ちゃま」を付けて用い、「様」は使わないことが多い。但し、希に上流の家族では「お父様」・「お母様」と格式的に言うことがある。

(2) 韓国の場合

a. 「第4世代」の「第1世代」・「第2世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の韓国の家庭における対面呼称は、父方・母方によって、また男女によって異な

るなど、複雑な形態である。しかし、(表2)でみるように、孫の世代が祖父母の世代に対する対面呼称は日本と類似している。つまり、「第4世代」にとって「第1世代」は「曾祖父母」であるが、対面呼称においては「第3世代」と同じく「④a(♂)」や「④c(♀)」や「④e(♂)」・「④g(♀)」のいずれも「②a(♂)」・「②b(♀)」に対して「ハラボジ(할아버지)」(お祖父さん)・「ハルモニ(할머니)」(お祖母さん)を用いる⁹⁾。但し、仮に父方や母方の祖父が同席しているとき、その区別のため「④a(♂)」や「④c(♀)」が「②a(♂)」・「②b(♀)」に対しては「ハラボジ(할아버지)」・「ハルモニ(할머니)」、そして母方の祖父母に対しては、接頭辞の「外」を付けて「外ハラボジ(외할아버지)」・「外ハルモニ(외할머니)」を対面呼称にすることも¹⁰⁾ある。

ここでも「ハラボジ(할아버지)」・「ハルモニ(할머니)」という対面呼称には、日本語の「さん」に相当する接尾辞が形としては見えないが、「お祖父さん」・「お祖母さん」と訳する。なお、会話の状況に応じて幼児視点と解されるときは、「お祖父ちゃん」・「お祖母ちゃん」と日本語訳することもある。

b. 「第4世代」の「第3世代」に対する対面呼称と接尾辞

韓国では、(表3)のように、両親に対して様々な対面呼称や接尾辞を用いるが、そこには歳と関わる要因も絡み合っている。つまり、一般的に大人になると、両親に対する対面呼称やその接尾辞に変化が見られる。

幼い頃は両親に対して「アッパ(아빠)」(パパ・お父ちゃん)、「オンマ(엄마)」(ママ・お母ちゃん)と言う。しかし、物心が付いたとき、男の子は「アッパ(아빠)」から「アボジ(아버지)」(お父さん)へ対面呼称が変わる傾向にある。一方、女の子の場合は「アッパ(아빠)」から「アボジ(아버지)」へ切り替えず、最近では嫁いでも「アッパ(아빠)」と呼ぶことが多い。但し、男の子は物心が付いても「オンマ(엄마)」という対面呼称を用い、「オモニ(어머니)」(お母さん)とは呼ばない。この傾向からみて、ある意味で「オモニ(어머니)」は呼称ではなく、名称に近い言葉であると考えられる。なお、大人になっても「第4世代」(子)の「第3世代」(親)に対する対面呼称として、「アボニム(아버님)」(お父様)、「オモニム(어머님)」(お母様)は用いない。しかし、手紙や文章の中における呼称としては、「ニム(님)」(様)付けの「アボニム(아버님)」、「オモニム(어머님)」を用いるのである。

ところで、韓国では子供に物心が付いたとき、父親にはほぼ例外なく、敬語を使う。一方、母親には使わず、概ね結婚をすれば、敬語を使うのが一般的な傾向である。

ここで、(図1)の「④e(♂)」や「④g(♀)」にとって自分の父親の兄夫婦に当たる「③a(♂)」や「③b(♀)」に対しては、「コンアボジ(큰 아버지)」(伯父さん)、「コンオモニ(큰 어머니)」(伯母さん)とする。但し、「第4世代」の中で、姻族関係の婿や嫁の場合は、必ず「ニム(님)」の接尾辞を付けて、「コンアボニム(큰 아버님)」・「伯父ニム(백부님)」(伯父様)、「コンオモニム(큰 어머님)」・「伯母ニム(백모님)」(伯母様)という

対面呼称を使う。

逆に、自分の父親の弟夫婦に対しては、「ジャゴンアボジ(작은 아버지)」(小父さん)、「ジャゴンオモニ(작은 어머니)」(小母さん)と言う。「小父さん」が独身の場合は、「三寸」という対面呼称を用いる。

ところで、「④e(♂)」や「④g(♀)」は、自分の父親の姉妹夫婦に当たる「③c(♀)」・「③d(♂)」や「③g(♀)」・「③h(♂)」に、それぞれ「姑母」、「姑母夫」という対面呼称を使う。ところで、大人になると、「ニム(님)」の接尾辞を付けて、「姑母ニム(고모님)」、「姑母夫ニム(고모부님)」と呼ぶこともある。

一方、「④a(♂)」や「④c(♀)」は、自分の母親の姉妹夫婦に当たる「③g(♂)」や「③h(♀)」に対して、「姨母夫」、「姨母」といい、大人になると、「姨母夫ニム(이모부님)」、「姨母ニム(이모님)」とする。「第4世代」の中で、姻族関係の婿や嫁は、「第3世代」に対して、必ず「ニム(님)」付けの接尾辞を用いて、「姑母夫ニム(고모부님)」・「姑母ニム(고모님)」、そして「姨母夫ニム(이모부님)」・「姨母ニム(이모님)」と言う。なお、「④a(♂)」や「④c(♀)」は、自分の母親の男兄弟、つまり「③a(♂)」には「外三寸」、「③b(♀)」には「外淑母」・「外淑母ニム(외숙모님)」と言う。

ここで「ニム(님)」(様)付けの「姑母夫ニム(고모부님)」・「姑母ニム(고모님)」、「姨母夫ニム(이모부님)」、「姨母ニム(이모님)」は、敬語の親疎機能によって、その関係が「疎い」ことを表していると言える。

c. 「第3世代」の「第2世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の韓国の家族における血族の、「第3世代」(子)が「第2世代」(親)に対して使う対面呼称は、「第4世代」の「第3世代」に対する呼称と同じである。

しかし、(図1)における姻族の「③b(♀)」(嫁) = 「ミヨノリ(며느리)」や「③d(♂)」(婿) = 「サウイ(사위)」からは、「②a(♂)」(義理の父)や「②b(♀)」(義理の母)に対する対面呼称の接尾辞が異なる。つまり嫁は、「ニム(님)」付けの接尾辞を用いて「アボニム(아버님)」(語意はお父様であるが、お舅様の意味)、「オモニム(어머님)」(語意はお母様であるが、お姑様の意味)という。この際、日本で言う「さん」付けではなく、必ず「様」付けに相当する「ニム(님)」を接尾辞として付けるのである。

なお、同じく婿の場合も、「丈人オロン(장인어른)」 = 「岳父ニム(약부님)」 = 「聘父ニム(빙부님)」(義理のお父様)、「丈母ニム(장모님)」 = 「岳母ニム(약모님)」 = 「聘母ニム(빙모님)」(義理のお母様)と呼び、必ず接尾辞は「ニム(님)」を付ける。(表1)で取りあげている接尾辞の、この「オロン(어른)」とは、直訳すれば、「大人」であるが、ここでは「様」の意味である。

このように、日韓の家庭における「上の世代」に対する対面呼称は、名前は用いず、家族関係を表す名詞に接尾辞を付けて用いることは共通しているが、接尾辞の付け方には相違が

ある。つまり、日本では幼児の視点で「上の世代」に対する対面呼称に接尾辞の「ちゃん／ちゃま」を使うが、上流家庭以外では「様」は付けない。一方、韓国では「上の世代」に対して「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」は付けず、姻族 (嫁・婿) は、必ず嫁ぎ先の人々に接尾辞「ニム (님)」付けを用いるのである。したがって、「ちゃん／ちゃま」は敬語の範疇に入れられ、「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」は敬語の範疇に入れられていないと考えられる。また、日韓の家族における「上の世代」に対する対面呼称や接尾辞には、地位・親疎を表す機能が確認できる。

第3章 家族における「同世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)における「第3世代」を中心にして、「同世代」同士の対面呼称の分析を進める。この関係にも年齢や家族内の序列によって上下が存在するため、目上から目下、目下から目上の方向性のもと、血族同士、血族や姻族、嫁いできた人々同士の対面呼称や接尾辞を考察する。但し、「第4世代」の「イトコ」同士の対面呼称は、「第3世代」の兄弟姉妹間の呼称と同じである⁽¹¹⁾。

(1) 日本

a. 血族同士

(図1)の「第3世代」(同世代)における目下(男)から目上(男・女)、つまり「③e (♂)」(弟)が「③a (♂)」(兄)を呼ぶ際は、「アンちゃん」、「ニイちゃん」、「オニイちゃん」「ニイさん」、「オニイさん」、「オニイ様」と言った対面呼称である。これらをまとめたのは、(表4)である。

(表4) 日韓の兄に対する対面呼称と接尾辞 (男/女)

日本(男/女)	あんちゃん・兄ちゃん・お兄ちゃん・兄さん	お兄さん	お兄様
韓国(男)	—	兄(형)	兄ニム(형님)
(女)	オッパヤ(오빠야)	オッパ(오빠)・オラボニ(오라버니)	オラボニム(오라버님)

参考：接尾辞の「ちゃん」は、「ちゃま」にも替えられる。

ところで、「アンちゃん」、「ニイちゃん」、「オニイちゃん」のような「ちゃん」付けは、幼い頃によく用いる傾向が強く、「ニイさん」、「オニイさん」は大人になっても使う呼称である⁽¹²⁾。但し、「オニイ様」は対面呼称として存在はしているものの、一般的には使わない。

一方、「③e (♂)」(弟)が「③c (♀)」(姉)を呼ぶときは、以下の(表5)のような対面呼称を用いるが、「様」付けはほとんど見られない。

(表5) 日韓の姉に対する対面呼称と接尾辞 (男/女)

日本 (男/女)	姉ちゃん・お姉ちゃん・姉さん	お姉さん	お姉様
韓国 (男)	ヌナヤ (누나야)	ヌナ (누나)	ヌニム (누님)
(女)	オンニヤ (언니야)	オンニ (언니)	—

参考：接尾辞の「ちゃん」は、「ちゃま」にも替えられる。

逆に、「同世代」における目上 (男) から目下 (男・女)、つまり「③a (♂)」(兄) が「③c (♀)」(妹) を呼ぶときは、呼び捨て、または「ちゃん」付けの接尾辞を用いる。ところで、同世代において結婚する前の兄弟同士、例えば「③a (♂)」(兄) が「③e (♂)」(弟) を呼ぶとき、目上の「兄」が目下の「弟」に対しては、呼び捨て、特に幼い頃は名前に「ちゃん」、「君」付けをよく用いる。

(図1) の「同世代」における目下 (女) から目上 (男・女)、つまり「③g (♀)」(妹) が「③c (♀)」(姉) に対する対面呼称は、(表5) に示した通りである。一方、「③c (♀)」(妹) が「③a (♂)」(兄) を呼ぶときは、(表4) の対面呼称、つまり「弟」が「兄」を呼ぶ場合と同じである。

逆に、「同世代」における目上 (女) から目下 (男・女)、つまり「③c (♀)」(姉) が「③g (♀)」(妹)、そして「③c (♀)」(姉) が「③e (♂)」(弟) を呼ぶときは、「兄」が「弟」を呼ぶケースとほぼ同じ対面呼称や接尾辞が使われる。

b. 血族と姻族

目上 (男) から目下 (男・女)、つまり(図1)における「③a (♂)」(兄) が「③d (♂)」(妹の夫) に使う対面呼称は、一般的に名前や名字に接尾辞の「さん」、または「君」を付けて用いる。この「君」は(表1)において取りあげている接尾辞である。そして、「③a (♂)」(兄) が「③f (♀)」(弟の妻) に用いるのは、名前に「さん」を付けた対面呼称が一般的である。

そして、姻族である「③d (♂)」(姉の夫) が「③e (♂)」(妻の弟) には「さん」・「君」、また「③d (♂)」(姉の夫) が「③g (♀)」(妻の妹) には名前に「さん」・「ちゃん」を付けた対面呼称を用いる。

逆に、目下 (男) から目上 (男・女) への「③e (♂)」(弟) が「③d (♂)」(姉の夫) を呼ぶ場合は、「お兄さん」、または名前に「さん」付けの対面呼称を使う。なお、「③e (♂)」(弟) が「③b (♀)」(兄の妻) に対しては、「お姉さん」、または名前に「さん/ちゃん」を付ける。「③h (♂)」(妹の夫) が「③a (♂)」(妻の兄) には、主に「お兄さん」という対面呼称を用いる。また、「③h (♂)」(妹の夫) が「③c (♀)」(妻の姉) には「お姉さん」とする。

一方、目上 (女) から目下 (男・女) の、「③c (♀)」(姉) が「③f (♀)」(弟の妻) を呼ぶ場合は、名前に「さん」・「ちゃん」を付けた対面呼称を使う。なお、「③c (♀)」(姉)

が「③h (♂)」(妹の夫)には、名前や名字に「さん」・「君」付けの対面呼称が一般的である。

逆に、目下(女)から目上(男・女)の、「③g (♀)」(妹)が「③b (♀)」(兄の妻)に対する対面呼称は、「お姉さん」といい、「③g (♀)」(妹)が「③d (♂)」(姉の夫)に対しては、「お兄さん」という対面呼称を用いる。そして、「③f (♀)」(嫁)が「③a (♂)」(夫の兄)には、「お兄さん」という対面呼称を使う。

ここで、「同世代」における血族と姻族間、つまり目下の目上に対する対面呼称には家族関係を表す名詞、逆に目上が目下の人に対する対面呼称は名前に接尾辞の「さん」を付ける傾向が強いと言えよう。但し、その家族の親疎程度や使う年代(年齢)によっては、「さん」だけではなく、「ちゃん」、特に男には「君」を使うこともある。

c. 嫁いできた人々同士

この間柄は、親しい関係であるかどうかによって、その対面呼称や接尾辞も変わってくる傾向が強い。以下は、家庭における一般的な対面呼称や接尾辞である。

まず、婿同士の関係で、目上(婿)から目下(婿)を呼ぶ場合、(図1)における「③d (♂)」は「③h (♂)」に対して、名字、または名前に「君」・「さん」付けの接尾辞を使う。そして、目上(婿)から目下(嫁)の、「③d (♂)」が「③f (♀)」に対する対面呼称は、名前に「さん」、親しい関係であれば「ちゃん」を付ける。

逆に、目下(婿)から目上(婿)である、「③h (♂)」が「③d (♂)」を呼ぶ対面呼称としては、「お兄さん」、または名字に「さん」を付ける。なお、目下(婿)から目上(嫁)、つまり「③h (♂)」が「③b (♀)」を呼ぶときは、「お姉さん」という対面呼称を用いる。

目上(嫁)から目下(婿)の、「③b (♀)」が「③d (♂)」・「③h (♂)」には、名前や名字に「さん」・「君」を付ける対面呼称を使う。そして、目上(嫁)から目下(嫁)となる嫁同士の、「③b (♀)」が「③f (♀)」を呼ぶ場合は、名前に「さん」・「ちゃん」を付ける対面呼称を用いる。

逆に、目下(嫁)から目上(嫁)の「③f (♀)」が「③b (♀)」、そして目下(嫁)から目上(婿)の、「③f (♀)」が「③d (♂)」に対しても同じく名前に「さん」付けの傾向が強い。

日本の家族における嫁いできた人々間の対面呼称には、主に接尾辞の「さん」を付け、「君」は姻族の婿に限って用いられる傾向にある。

d. 夫婦同士

夫婦間の対面呼称は、時代によってその呼称が変わってきている。一般的に、夫は妻に「お前」、もしくは呼び捨て、「アナタ」、また子供がいれば、子供の視点で「お母さん」・「ママ」と呼んだり、子供の名前を入れて「〇〇のママ」と呼んだりすることもある。

一方、妻は夫に対して、「アナタ」、または名前に「さん」を付けて呼んだりする⁽¹³⁾。場合によって子供がいれば、妻は夫に「お父さん」や「パパ」、もしくは子供の名前を入れて「○○のパパ」と呼ぶケースもある。ところで、若い世代の夫婦では、「アナタ」という呼称はあまり用いない傾向にある。

このように、日本の「同世代」間における対面呼称は、親疎の程度によって変わり、特にその接尾辞にも表れる。目上の人、姻族の婿に対する対面呼称の接尾辞として「君」をよく用いる。一方、目上の人、姻族の嫁に対しては、名前に「さん」・「ちゃん」を付けたり、場合によっては呼び捨てもする。

(2) 韓国

a. 血族同士

(図1)の「第3世代」(同世代)における目下(男)から目上(男・女)、つまり「③e(♂)」(弟)が「③a(♂)」(兄)を呼ぶ際は、(表4)のように、「兄(형)」(お兄さん)、「兄ニム(형님)」(お兄様)という対面呼称を用いる⁽¹⁴⁾。

この「兄」という対面呼称は、幼い頃によく用いる傾向が強く、一般的に結婚を境に「ニム(님)」(様)付けの「兄ニム(형님)」を用いる。ここで、対面呼称の「兄」には接尾辞の「さん」が見えないが、「お兄さん」と日本語で訳するのである。さらに、(表4)でみるように、「兄」とは話の内容や状況次第では、「あんちゃん・兄ちゃん・お兄ちゃん・兄さん」の日本語訳をすることもある。

一方、「③e(♂)」(弟)が「③c(♀)」(姉)を呼ぶときは、対面呼称として(表5)の「ヌナヤ(누나야)」(お姉ちゃん)・「ヌナ(누나)」(お姉さん)を用いるが、中年頃になると、「ヌニム(누님)」(お姉様)のように接尾辞に「ニム(님)」を付けた対面呼称を使うことが多い。

逆に、「同世代」における目上(男)から目下(男・女)、つまり結婚する前の兄弟同士、例えば「③a(♂)」(兄)が「③e(♂)」(弟)を呼ぶときは、名前に接尾辞の「ア(아)／ヤ(야)」を付けて対面呼称にする。なお、「③a(♂)」(兄)が「③c(♀)」(妹)を呼ぶときも、弟と同じ方法の対面呼称である。

ところで、兄弟が年齢を重ねて中年頃になると、兄が弟に対して人称代名詞の「ジャネ(자네)」(キミ)という対面呼称を使ったり⁽¹⁵⁾、また結婚した妹にはその夫の名字を取ってきて、例えば夫の名字が「張」なら、この「張」に(表1)で示した接尾辞の「室」や「ア(아)」を付けて、「張室ア(장실아)」という対面呼称も用いる。

(図1)の「同世代」における目下(女)から目上(男・女)、つまり「③g(♀)」(妹)が「③c(♀)」(姉)を呼ぶときの対面呼称や接尾辞は、(表5)の通り、「オンニヤ(언니야)」(お姉ちゃん)・「オンニ(언니)」(お姉さん)である。一方、「③c(♀)」(妹)が「③a(♂)」(兄)を呼ぶときは、(表4)で示したように、「オッパヤ(오빠야)」(お兄ちゃん)・

「オッパ (오빠)」(お兄さん) という対面呼称を使う⁽¹⁶⁾。

ところで、少し古い言い方ではあるが、現代の家族においても中年頃の女性は「オッパ(오빠)」の代わりに、(表4)のように「オラボニ (오라버니)」(お兄さん)、または「オラボニム (오라버님)」(お兄様) という対面呼称も用いることがある。

このように、韓国の「同世代」における兄弟姉妹同士の対面呼称は、目上が目下、目下が目上へのいずれも「ア (아) / ヤ (야)」の接尾辞を用いる。しかし、目上の人に対しては家族関係を示す名詞、目下の人には名前に「ア (아) / ヤ (야)」を付けるのである。特に、兄・姉に対する対面呼称は性別(男/女)によって異なる。そして、目上の人に対しては「ニム (님)」という接尾辞も用いられるが、これは敬語の親疎機能の中で「疎い」に当たると考えられる。

b. 血族と姻族

姻族が関わる対面呼称には、年齢よりも家族内における序列が優先であることがその特徴である⁽¹⁷⁾。

(図1)の「同世代」における目上(男)から目下(女・男)の「③a(♂)」(兄)が「③d(♂)」(妹の夫)に使う対面呼称は、一般的に名字に(表1)で示した接尾辞の「書房」を付ける。例えば、婚の名字が「金」なら「金書房」と呼ぶ。ちなみに、日本では婚の名字に「君」という接尾辞を付ける。そして、人称代名詞の「ジャネ(자네)」(キミ)という対面呼称も用いる。また、「③a(♂)」(兄)が嫁の「③f(♀)」(弟の妻)に用いる対面呼称は、「弟嫂」=「季嫂」に、(表1)で示した「氏」の接尾辞を付けて、「弟嫂氏」=「季嫂氏」という。「③d(♂)」(妹の夫)が「③e(♂)」(弟)には、つまり「③d(♂)」の序列が上であるため、「妻男」、「妹弟」という対面呼称を使う。また、「③d(♂)」が「③b(♀)」(妻の姉)には「妻弟」という対面呼称を用いる。

逆に、目下(男)から目上(男・女)の「③e(♂)」(弟)が「③d(♂)」(妹の夫)には、「姉兄」、「妹兄」、「妹夫」⁽¹⁸⁾の対面呼称を使う。なお、「③e(♂)」(弟)が「③b(♀)」(兄の妻)に対しては「兄嫂」、または接尾辞の「ニム(님)」(様)付けをして「兄嫂ニム(형수님)」(兄嫂様)の対面呼称を使う⁽¹⁹⁾。「③h(♂)」(妹の夫)が「③a(♂)」(妹の兄)には、自分より序列が上であるため、たとえ年齢が自分より下でも「兄ニム(형님)」という対面呼称を用いる。また、「③h(♂)」(妹の夫)が「③c(♀)」(妻の姉)には「妻兄」と呼ぶ。

一方、目上(女)から目下(男・女)の、「③c(♀)」(姉)が「③f(♀)」(弟の妻)に対しては、「オルケ(올케)」という対面呼称を用いる。「③b(♀)」(兄の妻)が「③c(♀)」(妹)に「アガッシ(아가씨)」(語意はお嬢様であるが、義理の妹様の意味)の対面呼称を使う。「③b(♀)」(嫁)に子供がいる場合は、その子供が「③c(♀)」に用いる対面呼称の「姑母」を借用して使う場合もある。

なお、「㉓b (♀)」(嫁)が「㉓e (♂)」(夫の弟)には、同世代の目下であっても、「ドリョンニム (도련님)」(語意はお坊ちゃんであるが、義理の弟様の意味)といい、上下や序列とは関係なく、「ニム (님)」を付けるのである。また、「㉔e (♂)」(甥)・「㉔g (♀)」(姪)が、「㉓e (♂)」の弟(おじ)に対して用いる対面呼称の「三寸」を借用して使うこともある。特に、「㉓e (♂)」(夫の弟)が結婚していれば、「書房ニム (서방님)」と呼ぶ。ところで、「㉓c (♀)」(姉)が「㉓h (♂)」(妹の夫)に対しては、「弟夫」という対面呼称を用いる。

逆に、目下(女)から目上(男・女)の、「㉓g (♀)」(妹)が「㉓b (♀)」(兄の妻)に対する対面呼称は、「オンニ (언니)」、または接尾辞の「ヤ (야)」を付けて「オンニヤ (언니야)」を用いており⁽²⁰⁾、これは血族の「㉓c (♀)」(姉)に対しても同じ対面呼称である。また「㉓g (♀)」(妹)が「㉓d (♂)」(姉の夫)に対しては、「兄夫」という対面呼称を使う。なお、「㉓f (♀)」(嫁)が「㉓a (♂)」(夫の兄)には、「アジュボニム (아주버님)」という対面呼称や接尾辞を用いる。

韓国における姻族(嫁・婿)は嫁ぎ先の人々に対して、歳や序列が目上の人々はもとより、目下の人々にも接尾辞の「ニム (님)」を付ける対面呼称を用いる。逆に、嫁ぎ先の限られた人は嫁に対して、対面呼称の接尾辞として「氏」、そして婿に対しては「書房」を付ける。

c. 嫁いできた人々同士

(図1)の「第3世代」における目上(男)から目下(男・女)の「㉓d (♂)」が「㉓h (♂)」(婿)の対面呼称として「同壻」、あるいは人称代名詞の「ジャネ (자네)」を用いる。そして、「㉓d (♂)」が「㉓f (♀)」(嫁)に対する対面呼称としては、(表1)で示した接尾辞の「宅」を付けて「妻男宅」を用いるが、「アジュモニ (아주머니)」とも言う。

逆に、目下(男)から目上(男・女)、つまり「㉓h (♂)」が「㉓d (♂)」には「兄ニム (형님)」、⁽²⁰⁾「㉓h (♂)」が「㉓b (♀)」に対しては「妻男宅」という対面呼称を用いる。

同じく(図1)の「第3世代」における目上(女)から目下(男・女)の「㉓f (♀)」が「㉓h (♂)」に対しては、「㉓h (♂)」の名字に接尾辞の「書房」を付けて、例えばその名字が「張」なら「張書房」というのが一般的である。また、場合によっては、「㉔e (♂)」や「㉔g (♀)」が「㉓h (♂)」に対して用いる対面呼称の「姑母夫ニム (고모부님)」を借用して使うこともある。そして、「㉓b (♀)」が「㉓f (♀)」(嫁)の対面呼称として「同壻」、あるいは接尾辞の「ヤ (야)」を付けて、「同壻ヤ (동서야)」ともする。

逆に、目下(女)から目上(男・女)の「㉓f (♀)」が「㉓b (♀)」(嫁)の対面呼称として「同壻」を用いるが、この際は女同士であっても「兄ニム (형님)」という対面呼称を用いる⁽²¹⁾。ところで、「㉓f (♀)」の「㉓d (♂)」に対する確立された対面呼称はなく、一般的に「アジュボニム (아주버님)」という。

d. 夫婦同士

韓国における夫婦間の対面呼称も、日本と同様、時代によってその呼称が変わってきている。一般的に、夫婦は「ヨボ (여보)」(そもそもは「おい」という呼びかけであるが、「アナタ」の意味で使われている)、「当身」(アナタ)、「自己」(アナタ)・「自己ヤ (자기야)」と呼び合う。しかし、夫は妻に「ヤ (야)」(「おい」という呼びかけ)、または子供がいれば、例えば子供の名前をそのまま使い「泰虎ヤ (태호야)」と呼んだりもする。この対面呼称を用いる場合、子供と妻が同じ場所にいた時は、2人が共に答えることも起きるのである。子供の名前をそのまま用いて妻を呼ぶ呼び方は、日本では見受けられない。ところで、歳をとって老いると、夫は妻に「イムジャ (임자)」とも呼ぶ。しかし、「ヨボ (여보)」・「当身」という対面呼称は、若い夫婦間ではあまり用いない傾向にある。

一方、妻は夫に対して、子供がいれば、子供の父親に対する対面呼称を借用して「アッパ (아빠)」(パパ・お父ちゃん)、また希に日本と同様に、例えば「泰虎アッパ (태호아빠)」というふうにご子孫の名前をとってきて用いることもある。歳を取って老人になると、妻は夫に対して「令監」という対面呼称も使う。

ところで、最近の若い夫婦において妻は、夫の名前に(表1)で示した接尾辞の「氏」付けをしたり、本来は「お兄さん」という意味で使われる「オッパ (오빠)」を、対面呼称として用いたりする。一般的に恋愛関係にある男女は、互いに名前に「氏」の接尾辞を付けて呼び合ったりする。しかし、結婚して妻が子供をもつと、夫の妻に対する対面呼称から徐々に妻の名前は消えていくと言えよう。

このように、日韓の「同世代」では、血族は年齢の多寡による上下関係であるが、姻族関係を入れた場合は、家族における序列関係によって、その上下や対面呼称が決まる。そこで、血族同士の対面呼称、特に目下が目上を呼ぶときは、家族関係を示す名詞に接尾辞を付け、逆に目上から目下への対面呼称は、名前に接尾辞を付ける傾向が強い。

ところで、日本の「同世代」では、目上が目下に対して呼び捨てを用いることがあるが、韓国ではほとんどない。一方、日韓ともに名字を対面呼称にするのは、妻の実家の目上の人、姻族の婿に対して使うケースで、日本は「君」、韓国は「書房」という接尾辞を付ける。特に、韓国では姻族(嫁・婿)は、嫁ぎ先の家族の人々に対して、年齢や序列の上下を問わず、必ず接尾辞の「ニム(님)」を付ける。但し、婿だけは序列の下の人に対しては「ニム(님)」を付けない。

第4章 家族における「下の世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の日韓の家庭における「第1世代」の「第2世代」・「第3世代」・「第4世代」、そして「第2世代」の「第3世代」に対して用いる対面呼称や接尾辞を中心に分析を行う。

(1) 日本

a. 「第1世代」の「第3世代」・「第4世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の「第1世代」にとって「第3世代」は「孫」、「第4世代」は「曾孫」に当たるが、一般的な対面呼称は、呼び捨て、あるいは名前に接尾辞の「ちゃん」、特に男の子には「君」を付ける呼び方である。但し、「第3世代」の姻族関係に当たる人に対しては、男女(孫婿・孫嫁)を問わず、名前に接尾辞の「ちゃん/ちゃま」・「さん」、とりわけ男(孫婿)には「君」付けの対面呼称を用いる傾向が強い。

b. 「第2世代」の「第3世代」に対する対面呼称と接尾辞

同じく(図1)の「第2世代」は親、「第3世代」は子であるが、「第3世代」には嫁や婿が含まれている。ところで、「第1世代」(親)の「第2世代」(子)に対する対面呼称は、この「第2世代」が「第3世代」に対して使う呼称と同じである。

まず、子供が幼い頃は対面呼称として名前に「ちゃん」付けの接尾辞が多く、呼び捨てもあるが、「さん」付けもする。但し、子供に対する「さん」付けの対面呼称は、子供が成人し比較的歳をとった時に使用する傾向が強い⁽²²⁾。

ところで日本では、例えば(図1)の「②b(♀)」(妻)が「②a(♂)」(夫)を亡くして、結婚した子供夫婦の「③e(♂)」(子)・「③f(♀)」(嫁)と同居している場合、「④e(♂)」(孫子)・「④g(♀)」(孫娘)が「③e(♂)」(父)に対して用いる「お父さん」という対面呼称を借用して、自分の息子の「③e(♂)」(子)に対して「お父さん」と呼ぶこともある。

一方、姻族関係の嫁に対する対面呼称には、名前に「ちゃん」、または「さん」を付けたり、場合によっては呼び捨てをしたりもする。そして、婿には名前や名字に接尾辞の「さん」、または「君」付けの対面呼称を用いる。この「君」という接尾辞は、一般的に「②a(♂)」・「②b(♀)」(義理の両親)が「③d(♂)」・「③h(♂)」(婿)に対して使う。また場合によっては、「②a(♂)」(義理の父)は「③d(♂)」・「③h(♂)」(婿)のことを呼び捨てで呼ぶこともある。

(2) 韓国

a. 「第1世代」の「第3世代」・「第4世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の韓国の家族における「第1世代」にとって、「第3世代」・「第4世代」は孫である。但し、「第3世代」には姻族関係の男女(孫婿・孫嫁)が含まれている。

そこで、「上の世代」は「下の世代」の人に対して、名前に接尾辞の「ア(아) / ヤ(야)」をつけて呼ぶ傾向が強い。場合によっては、人称代名詞の「ヌ(너)」(お前)という対面呼称も用いる。但し、結婚をすれば少し変わるものの、基本的に「第1世代」(親)の「第2世代」(子)に対する対面呼称や接尾辞は、次の「第2世代」の「第3世代」に対するのと

同じである。

なお、「第1世代」が「第3世代」の孫嫁や孫婿に対する対面呼称は、次の「第2世代」が「第3世代」の嫁・婿に対する対面呼称と同じである。ところで、曾祖父母、祖父母、または両親が幼い孫娘や娘に対して、大事にして可愛がる意味で「公主ヤ (공주야)」(お姫ちゃん)・「公主ニム (공주님)」(お姫様) という対面呼称も用いる。そもそも「公主 (공주)」とは、王妃から生まれた王女で、王の姫という意味である。

b. 「第2世代」が「第3世代」に対する対面呼称と接尾辞

(図1)の「第2世代」は親、「第3世代」は子であるが、「第3世代」には姻族の嫁や婿が含まれている。

まず、(表1)でみるように、親が子供に対して「ア (아) / ヤ (야)」の接尾辞をつける対面呼称は、概ね子供が大人になるまでの間、用いられる。子供が結婚して孫がいた場合は、「アボマ (아범아)」=「エビヤ (애비야)」(子供の父という意味)、または孫の名前をとってきて「○○アボマ (아범아)」=「○○エビヤ (애비야)」の対面呼称も使う。

ところで、嫁に対する対面呼称、つまり「②a (♂)」・「②b (♀)」(義理の両親)が「③b (♀)」・「③f (♀)」(嫁)に対して「アガヤ (아가야)」=「エギヤ (애기야)」(赤ちゃんの意味)、または「エミヤ (애미야)」=「オモマ (어멈아)」(子供の母という意味)を用いる。これらは、名前でもなく家族関係を示す名詞でもない、嫁に配慮した自分の子供扱いの優しい対面呼称である。この一般名詞に付けた接尾辞の「ア (아) / ヤ (야)」は、対面呼称における優しさを、より一層、漂わせると言えよう。

一方、「②a (♂)」・「②b (♀)」(義理の両親)が「③d (♂)」・「③h (♂)」(婿)に対しては、名字に接尾辞の「書房」を付ける。例えば、名字が「金 (김)」の婿なら「金書房」と呼んだり、または人称代名詞の「ジャネ (자네)」(キミ)という対面呼称も用いる。

このように、日韓の家庭における「下の世代」に対して使用する対面呼称や接尾辞には、世代間の上下による地位、その関係における親疎を表している。特に、韓国の嫁・婿が嫁ぎ先の人々に用いる「ニム (님)」という接尾辞は、姻族関係であることを表す機能があると言える。なお、両国の家庭における接尾辞である日本の「君」、韓国の「書房」は、婿に対して使うという点で、ほぼ同じ役割を果たしていると言える。

おわりに

日韓の家庭における対面呼称や接尾辞には類似点があるものの、相違点もある。そこで本稿では、従来の研究においてあまり関心が払われなかった家庭という環境に限定して、対面呼称や接尾辞の付け方の傾向、その接尾辞の敬語としての機能について分析を行った。

日本の「ちゃん／ちゃま」、韓国の「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」はそれぞれ対応する

対面呼称の接尾辞であるが、日本では名前や家族関係を表す名詞に付けられる反面、韓国では名前の対面呼称に付けられる傾向にある。特に、この日本の「ちゃん／ちゃま」は、「同世代」・「上の世代」に対しては家族関係を表す名詞、「下の世代」には名前に付けて用いられる。

しかし、韓国の「ア (ㅇ) / ヤ (ㅇ) / イ (ㅇ)」は家族関係を表す名詞には付けず、名前や一般名詞に付け、また眼下の人に用いる傾向が強い。したがって、日本の「ちゃん／ちゃま」は敬語の接尾辞に分類されるのに対し⁽²³⁾、韓国の「ア (ㅇ) / ヤ (ㅇ) / イ (ㅇ)」が敬語の接尾辞として分類されない⁽²⁴⁾所以はここにあると言える。

ところで、一般的に日本の家庭において、目下の人には名前に接尾辞の「ちゃん」や「さん」を付けるか、または呼び捨てをし、韓国では名前に接尾辞の「ア (ㅇ) / ヤ (ㅇ) / イ (ㅇ)」を付けて呼ぶ傾向にある。特に、「上の世代」が「下の世代」に接尾辞の「さん」を付けることや名前を呼び捨てすることは、日本ならではの特徴と言えよう。

日韓の家庭では「上の世代」が「下の世代」、「同世代」において目上が目下の人に用いる対面呼称と接尾辞、敬語の使い方は、幼い頃と違って、大人になると変わってくるのである。なお、日韓の家族における「下の世代」が「上の世代」、血族の「同世代」同士における目下の人が目上に対して用いる対面呼称は、家族関係を表す名詞に接尾辞を付ける傾向にある。その接尾辞は、「さん／様」・「ニム (님)」(様)があるが、特に「様」・「ニム (님)」は日韓の家庭では独特な使い方である。つまり、日本では「様」は対面呼称として、上流家庭以外はあまり使わないのに対し、韓国では接尾辞の「ニム (님)」が使われる。

韓国では姻族関係の人である嫁や婿が、嫁ぎ先の家族構成員に対して、「上の世代」や「同世代」などの年齢の上下に関係なく、構成員の全員に必ず「ニム (님)」付けの対面呼称を用いるのである。この姻族の用いる「ニム (님)」付けの対面呼称は、必ずしも目上の人に限るわけではなく、目下の人にも用いられるため、姻族と血族を区別する、つまり親疎の機能の中で「姻族関係を表す機能」を果たしていると言える。

ところで、家庭における姻族に対する対面呼称の接尾辞の使い方として、日本では「上の世代」や「同世代」が嫁に対しては名前に「ちゃん」・「さん」を付け、場合によっては呼び捨てにし、婿に対しては名字に「君」の接尾辞がよく用いられる。この対面呼称に対して、嫁も婿も血族が彼女ら、彼らに用いている対面呼称と同じ呼称を使って応えるのである。

しかし、韓国では「上の世代」が嫁に配慮した自分の子供扱いの優しい一般名詞に接尾辞を付けて「アガヤ (아가야)」・「エギヤ (애기야)」(赤ちゃんの意味)、または「エミヤ (애미야)」・「オモマ (어멈아)」(子供の母という意味)といった対面呼称を用いる。一方、婿には彼の名字に「書房」という接尾辞を付けて呼ぶ。このような対面呼称や接尾辞で呼ばれた韓国の嫁や婿は、日本とは違って、嫁ぎ先の人々に対して、血族間では使わない接尾辞の「ニム (님)」を付けた対面呼称を用いるのである。

このような日韓の家庭における嫁や婿に対する対面呼称、逆に嫁や婿が嫁ぎ先の人々に対

する対面呼称と接尾辞の差は、両国の家族制度、特に名字制度の違いを反映しているものと考えられる。つまり日本では、結婚をすれば嫁が嫁ぎ先の名字に替えるため、名字の上でも嫁ぎ先の家族の一員となる。一方、婿は一般的に名字を替えず、妻の実家とは異なる名字を保持するため、その名字に「君」を付けて呼ぶことにより、「他門」であることが差別化されているのである。しかし、嫁は兎も角、婿も妻の実家の人々に対して、血族が用いるのと同じような対面呼称や接尾辞を使うのは、婿も婿養子になった場合は、妻の実家に合わせて名字を替えることができるという制度に由来するものであろう。

他方、韓国では嫁ぎ先の「上の世代」の人々が嫁を家族の一員として配慮した、つまり自分の子供扱いの言葉を使った優しい一般名詞の対面呼称を用いる。しかし、韓国の嫁は結婚しても名字が変わらないという制度のため、血族は用いない接尾辞の「ニム (님)」を付けて嫁ぎ先の人々を呼ぶことで、嫁が「他門」であることを表す。また、婿に対しては、名字に「書房」という接尾辞を付けた対面呼称を使うことで「他門」として区別するが、婿自身も「ニム (님)」付けの対面呼称を用いることで、自分が「他門」であることを示している。これは、韓国では仮に婿養子になっても、妻の実家の名字に合わせて自分の名字を替えることができないことの表れであろう⁽²⁵⁾。

なお、日韓のそれぞれにおいて用いられる接尾辞の「氏」・「君」／「氏 (씨)」・「君 (군)」は、日本の家庭において「氏」は使わず、一方、韓国では「君 (군)」は用いないのである。特に、「オロン (어른)」、「氏」、「室」、「宅」は、韓国の家庭ならではの接尾辞である。

このように、日韓の家庭における対面呼称や接尾辞には、それぞれ共通の傾向や異なる使い方の特徴があり、また従来の研究において指摘されてきた敬語の機能の中で、年齢・地位・親疎の機能に加えて、部分的には性別による機能も確認される。さらに、韓国の接尾辞では「姻族関係を表す機能」が含まれているのである。

また、日韓において、家族に対して用いる対面呼称に付ける接尾辞は、その使い方が類似しているようで異なるところがあることを指摘した。つまり、韓国の対面呼称に日本語の「さん」に相当する接尾辞が付いていなくても、話の内容次第では「さん」、「ちゃん／ちゃま」という日本語訳をする。また反対に、韓国の「ニム (님)」付けの対面呼称であっても、日本の状況に応じて、「様」ではなく「さん」と訳す。逆に、日本の「さん」であっても、韓国の家庭の人間関係に合わせて、「ニム (님)」と訳することも可能である。

注

- (1) 南不二男『現代日本語の構造』(大修館書店、1974年) 222頁では、「氏」・「君」が日本語の敬語として分類されていない。
- (2) スジョンスウ (서정수) 「韓日の敬語法の比較研究—現代語を中心に— (韓日 兩國語의 敬語法 比較 研究—現代語를 중심으로—)」(『敬語法の研究 (존대법의 연구)』翰信文化社、1997年、韓国) 149頁。ここで、韓国語の「君 (군)」・「ア (아) / ヤ (야) / イ (이)」は敬語として分類されていない。

- (3) 賈惠敬『敬語の対照研究』(白帝社、2001年) 89～90頁。
- (4) 前掲賈惠敬『敬語の対照研究』91頁で、現代敬語とは、日韓ともに時期的に1945年から今に至るまでの敬語としており、本稿でもこの時期区分に準ずることとする。
- (5) 白同善「絶対敬語と相手敬語 (절대경어와 상대경어)」(『日本語の待遇表現の研究 (일본어의 대우 표현연구)』ボゴサ (보고사)、2003年、韓国)などを参照されたい。
- (6) 村上元彦『サラリーマンの「会話学」』(実務教育出版、1981年)では、人間関係を親疎の点から4つのレベルに分けてとらえているが、肉親・家族は「第1レベル」に分類している。
- (7) 両国の社会において使われる接尾辞に関しては、前掲スジョンスウ (서정수)「韓日の敬語法の比較研究—現代語を中心に— (韓日 兩國語의 敬語法 比較 研究—現代語를 중심으로—)」149～150頁を参照されたい。
- (8) 社会や家庭で用いる接尾辞の「君」に対比される韓国の接尾辞は「嬢 (양)」であるが、家庭では使わず、一般的に職場で上司が部下の未婚女性に限って付ける接尾辞である。この場合、氏名(フルネーム)・名前・名字のいずれにも「嬢」を付けるのである。
- (9) 韓国における家族関係の対面呼称については、イムヨン (이무영)『韓国語の正しい礼儀 (우리말 바른 예절)』(デボサ (대보사)、1996年、韓国)と合わせて参照されたい。
- (10) 韓国では、母方には「外」という接頭辞を付ける。
- (11) 従兄弟間の詳しい呼称については、拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」(『言語と文化』12号、甲南大学国際言語文化センター、2008年) 127～130頁を参照されたい。
- (12) 前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」124～125頁では、「同世代」の兄について詳しく述べられている。
- (13) 永田友市「距離表現としての現代敬語」(『愛知淑徳大学論集』文学部編11号、愛知淑徳大学、1986年) 53頁で、氏は夫婦の会話では距離をなくするのが普通であるとする。
- (14) 韓国の兄については、前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」125～128頁を参照されたい。
- (15) 「ジャネ (자네)」(キミ) という人称代名詞は「ヌ (너)」(お前) より丁寧な言葉であって、同年輩や年下に用いられる。前掲賈惠敬『敬語の対照研究』128頁を参照されたい。
- (16) 前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」125～128頁。
- (17) 前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」131～142頁。
- (18) この対面呼称を文字通り解釈すれば、妹の夫であるが、姉の夫という意味でもある。
- (19) 前掲イムヨン (이무영)『韓国語の正しい礼儀 (우리말 바른 예절)』41頁では、「アジュモニ (아주머니)」・「アジュモニム (아주머님)」も使われるとする。
- (20) 前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」135頁。対面呼称に加えて、名称は「オルケ (올케)」・「セオンニ (새언니)」である。
- (21) 前掲拙稿「日韓社会の人間関係における「兄」について—呼称と名称を中心とした特徴の比較—」139頁。
- (22) 『これからの敬語』(第1期国語審議会、文部省、1952年)基本方針(2)で、「これまでの敬語は上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない」ということが家族関係において活かされていることと理解される。

- (23) 前掲南『現代日本語の構造』222頁。
- (24) 前掲スジョンソウ(서정수)「韓日の敬語法の比較研究—現代語を中心に—(韓日 両国語의 敬語法 比較 研究—現代語를 중심으로—)」149頁。
- (25) 韓国では、女性といい、男性といい、結婚をして死ぬまで自分の名字を替えることはなく、名字を替えることは侮辱的なこととして受け止める。韓国では、間違いないことや揺るぎない事実であることを誓うとき、「これが嘘なら、僕は名字(姓)を替える(이게 거짓말이라면 내가 성을 바꿀게)」といった言葉を交わす。このように韓国人は自分の名字にこだわり、名字は替えるものではないという認識が根強い。1939年、日本の植民地支配期に「制令第19号」でもって、韓国人の名字を日本式に替える「創氏改名」に激しく抵抗したのも、ここにその理由がある。したがって、「異性不養」という言葉の通り、名字の異なる者を養子にとらないのが、一般的である。養子をとる場合は、男系の同じ名字をもつ人から受け入れるのである。

しかし、2005年3月2日、韓国では戸主制が廃止され、2007年4月27日、その代替法として「家族関係の登録などに関する法律(가족 관계의 등록에 관한 법률)」(法律第8435号)を制定し、2007年5月17日に公布、2008年1月1日より施行している。その100条1項によって、連れ子を抱える女性が、再婚した夫の名字に合わせて連れ子の名字を替えることや、また養子を迎え入れて、その養子の名字を里親の名字に合わせて替えることもできるようになったのである。韓国の『民法』781条1項・6項も合わせて参照されたい。